

One
Wellfare

動物介在療育法の可能性



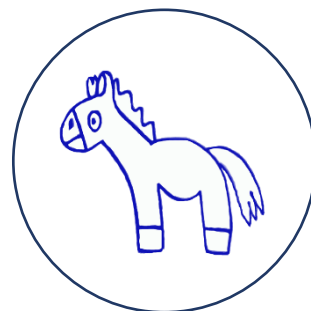
公開シンポジウム報告書

長崎大学 医学部 記念講堂

2023年3月12日(日) 9時30分~12時30分

公開シンポジウム

One Welfare 動物介在療育法の可能性



共 催：社会福祉法人 南高愛隣会
国立大学法人 長崎大学 多文化社会学部
場 所：長崎大学医学部記念講堂
日 時：2023年3月12日(日)9時30分～12時30分

総合司会	佐藤 靖明	長崎大学・准教授		
趣旨説明	賽漢卓娜	長崎大学・教授	2
基調講演	人と馬を癒すホースセラピーの世界			
	局 博一	東京大学・名誉教授	3
講 演	南高愛隣会のホースセラピー現場			
	絢野 ナチン	社会福祉法人南高愛隣会・室長	6
	動物介在介入における動物福祉			
	野瀬 出	日本獣医生命科学大学・准教授	9
	馬とダウン症者の関わりから考える One Welfare			
	柿沼 美紀	日本獣医生命科学大学・教授	13
	感覚統合と発達障害			
	岩永 竜一郎	長崎大学・教授	15
パネルディスカッション				
	コーディネーター			
	門司 和彦	長崎大学・教授	20
閉会のご挨拶	田島 光浩	社会福祉法人南高愛隣会・理事長		
要旨録			24

本シンポジウムは、長崎大学地域共同研究支援事業「ホースセラピーにおける馬と障がい者の関係性に関する研究」による助成を得て開催するものです。

趣旨説明

賽漢卓娜（長崎大学）



長崎大学多文化社会学部の実習科目「リサーチ基礎（インタビュー、参与観察）」（2022年度）

- ・長崎市農業型公園「あぐりの丘」で南高愛隣会が運営する乗馬施設「TERRACEからふる」(当時)でフィールドワーク
- ・2年生中心の計25名の学生
- ・ホースセラピーの現場を多角的に調査した。

長崎大学多文化社会学部は、実習科目「リサーチ基礎、インタビュー、参与観察」として長崎市農業公園型「あぐりの丘」で南高愛隣会が運営する乗馬施設「からふる」でフィールドワークを実施しました。

当該授業では2年生を中心に、計25名の学生がホースセラピーの現場を調査し、およそ2カ月の調査と学習を経て、2022年7月6日に「馬と生きる豊かな社会へーホースセラピーの現場から」という公開研究報告会を実施しました。

報告は、「人間の態度に対する馬の反応に関する研究」、「ホースセラピーの効果」、「長崎市における乗馬施設の需要」、「モンゴル放畜社会からみた日本の家畜飼育環境の課題」、「馬の物語をつくる」という5つのテーマに沿って行われました。

報告会



このような研究活動を通じて、学生・教員共にホースセラピーというフィールドに関心を持つようになり、長崎大学の地域共同研究支援事業に応募したところ、採択されました。この支援事業は、県内の企業などが抱える具体的な課題を解決する本学の研究者に対して研究費を支援するというものです。

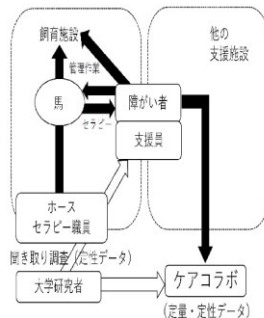
右掲の経緯で、南高愛隣会と長崎大学は共同研

長崎大学 地域共同研究支援事業

長崎大学地域共同研究支援事業は、県内企業等が抱える具体的な課題を解決する本学研究者の共同研究に対し、共同研究に要する直接経費の同額を本学研究者へ支援する事業です。

- ・2022年度長崎大学地域共同研究支援事業採択 南高愛隣会×長崎大学

- ・テーマ：「ホースセラピーにおける馬と障がい者の関係性に関する研究」
- ・研究背景：社会福祉法人南高愛隣会は、1992年より障がい者を対象としたホースセラピーを実施している。2020年以降、馬の飼育環境を変えたことで、馬が扱いやすい状態となることが観察される。
- ・研究目的：本研究では、障がい者の心身と生活の側面からの調査・分析をとおして、馬と障がい者の良好な関係性がもたらすホースセラピーの治療効果を明らかにする。



究をスタートいたしました。本研究のテーマは「ホースセラピーにおける馬と障がい者の関係性に関する研究」です。研究背景として、1992年から障がい者を対象としたホースセラピーを実施している社会福祉法人南高愛隣会では、2020年以降に馬の飼育環境を変えたことで、馬が扱いやすい状態になるとともに、障がい者の行動も改善してきたということが観察されています。以上のような状況を受けて、障がい者の心身と生活の側面からの調査・分析を通して、馬と障がい者の良好な関係性がもたらすホースセラピーの治療効果を明らかにする、ということをも本研究の研究目的といたしました。

人と馬を癒すホースセラピーの世界

局 博一（東京大学 名誉教授）



日本で乗馬療法を始めた先駆者の方は何名かいらっしゃいますが、そのうちの一人に長谷川泰造先生という方がいらっしゃいます。弁護士で大変実践力のある方でした。私がホースセラピーに関心を持ちはじめた頃、長谷川先生たちのグループが実施していた乗馬会でご挨拶したのがきっかけで、多くの方々と触れ合う機会をいただけました。長谷川先生は、実娘が馬に興味・関心を持っていたことから、ご自身で乗馬療法を始め、南高愛隣会で実娘と馬と一緒に暮らせるよう尽力した方です。

1995年、長谷川先生たちのグループは日本乗馬療法協会を立ち上げました。この協会は、年に1回程度、乗馬会を実施しており、今年（2023年）も茨城県つくば市でふれあい乗馬会を実施しておりました。

ホースセラピーとは、馬が介在・介入する教育療育活動、あるいは補完的な医療活動の総称になります。ホースセラピーの主目的は、病気を治すことではなく、日常生活の質（QOL）を高めることに視点を置きます。ホースセラピー活動の最たる特徴は、極めて学際的な領域である、ということです。動物学、教育学、心理学、医学、パラメディカル、社会福祉の分野、動物福祉の分野、市民活動、といった様々な分野が互いに関連・連携しあって成り立つ活動です。

ホースセラピーを行う意義は、精神的・肉体的な改善を通じて、自己肯定感を高め、前向きな気持ちになって生きていき、コミュニケーション能力の向上により社会的適応力が向上することです。そして、自信により自分の居場所に気づき、いつの間にか生きる力が生まれてくる、というこ

ホースセラピーとは？
 （乗馬療法、馬介在療法、ヒポセラピー...）

基本概念

- ◎ 馬が介在（介入）する教育/療育活動や補完的医療活動
- ◎ 病気を治すことが主目的ではなく、日常生活の質（QOL）を高めることに視点

<特色>
 学際的領域：
 動物学、教育学、心理学、医学・パラメディカル、社会福祉、動物福祉、市民活動などの分野が関連、連携

ホースセラピーの基本精神は、動物への思いやり。動物は大切なパートナーであるということ。それから、強いストレスがかからないように配慮することも必要です。生理学的には、全てのストレスが悪いというわけではありませんが、ストレスがあまりにも長時間持続すると様々な障害が出てくるので、十分な配慮が必要です。常に優しい接し方でスキミングを図るのはもちろん、十分な栄養や水分補給、衛生管理、そして一定の自由移動空間が必要です。同じ場所に閉じ込めるのではなく、自由に動き回れる時間・空間と適度な運動が必要です。これに加え、日々の病気、疾

ホースセラピーの意義

- ◎ 精神的、肉体的な改善を通じた自己肯定感や社会的適応力の向上、居場所の気づき
- ◎ 本人、保護者、施設関係者のQOL向上
- ◎ 馬の社会的貢献（ソーシャルホースとしての存在意義）

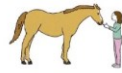
とがあります。結果、本人はもちろん、家族や施設関係者のQOLも向上するということがあります。また、馬自身も、社会的に貢献することによって、存在意義が高まります。

予防にも十分な配慮が必要です。

基本精神

- 動物（馬）は大切なパートナー
- 強いストレスがかからないように配慮

ストレス軽減・安心環境



- 優しい接し方でスキンシップ
- 十分な栄養・水分補給、衛生管理（良好な飼養環境）
- 一定の自由移動空間と適度な運動
- 運動後の十分な休憩
- 疾病予防（予防接種、健康チェックなど）

厩舎での一日の仕事は、朝・夕に餌と水を与えたり、馬房の掃除、馬の体の手入れ（蹄の手入れやブラッシング）などがあります。特に馬の体の手入れでは、馬とコミュニケーションをとるいい機会なので、馬の健康状態やコンディションを確認する機会にもなります。

ホースセラピーの実施形態は招致型と訪問型の2つがあります。招致型というのは、自分たちの土地に参加者がやってくるという形になり、訪問型は馬とスタッフが必要な社会施設や学校、地域の公共施設、公園等に赴き活動を行うものです。医療的な要素を含む馬介在療法の場合、多くは招致型になり、様々な職種の治療関係者と連携を図りながら行うこととなります。

公益社団法人全国乗馬倶楽部振興協会という全国的な団体では、平成19年から「大衆と馬とのふれあいタイム推進事業」を行っており、各地の馬介在活動を支援しております。このような活動の主催者からの報告によると、保護者と受入側には喜びや驚きがあったという感想があり、子供には協調性や積極性、学習面での変化といったことが多くあり、加えて馬への関心、愛着、理解の深まりなどについてもありました。また、参加者だけではなく、運営側も満足感や達成感があったという報告がありました。

医療的な分野となる馬介在療法は、専門的な知識も必要となるため、作業療法士や理学療法士、言語聴覚士、医師、看護師、臨床心理士、保育士といった専門家たちとの連携のもとで行われております。馬介在療法における医療者との連携・情報共有で一番最初に大事なことは、参加者の健康状態や障がいの種類・程度、困りごとなどを事前に把握することです。そして、参加者の目標を明確にして、短期的・長期的な目標をコミュニケーションを通じて設定し、それに応じたプログラムを作ります。

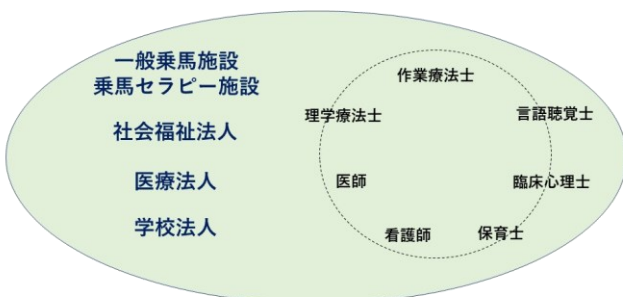
プログラム全体の流れは、乗馬前の準備、乗る人自身の準備があり、乗馬の順番待ち、馬への挨拶、乗馬、そして馬具の片付けなど、様々な作業があります。乗馬セラピーをやって色んなことが改善されたという話がありますが、それは馬に乗っている時だけの効果とは言いがたく、乗馬前後の作業過程も含めて総合的に効果が出ているのではないかと考えられます。

馬介在療法を実施する場合の留意点は、一つに、人的体制、馬の体制など準備が不十分な段階では無理な計画を立てないこと。そして、二つ目に自分たちの能力の範囲内で実施すること。三つ目に、実施している当日に

馬介在療法（補完的医療活動）

ホースセラピーの実施形態

実施主体者と専門家との連携

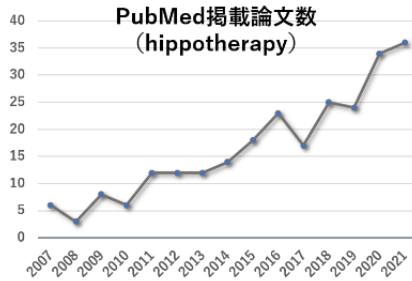


- 馬介在活動/馬介在教育
 - 招致型：自施設での実施
 - 訪問型：福祉施設、学校、地域の公共施設など
- 馬介在療法
Equine-assisted therapy (EAT) (ヒボセラピー)
 - 招致型：自施設での実施が一般的
 - 医療関係者（医師、理学療法士、作業療法士など）との連携、協力のもとに実施

馬介在療法に関する研究論文数の推移

最近の15年間（2007-2021）では
250編

（乗馬シミュレーターおよび馬自体の研究
報告は除く）



馬の状態がおかしい、スタッフまたは利用者の健康状態が良くない、天候が悪くなってきた、といった場合は中止するという決断も必要です。最後に、治療効果を最初から過度に期待しない・期待させない、ということです。

少し学術的な話になりますが、学術的な研究は戦後1950年頃から始まってきましたが、1990年くらいから徐々に研究報告が増えてきました。2007年から2021年の15年間では、PubMedで検索すると250編ほどの研究論文が出てくるほど、年々増加傾向にあります。

様々な研究報告がありますが、全体的な評価としては、脳性麻痺、多発性硬化症、様々な障害、高齢者、そのような方を対象とした論文がある程度まとまって出ております。

自閉症、発達障がいなどの多動のお子さんを持つ保護者の感想としては、パニック障がい落ち着いてきた、学校でも友達が増えてきた、手の使い方が上手になった、など良い報告があります。

最後に、馬と人との間のコミュニケーションを通じて、相互に良い関係を築くことを大切にすると、結果的にそれが良いホースセラピー効果につながるのではないかと考えております。人は馬に癒され、馬は人に癒される社会の輪が少しでも広がっていくことを期待しております。

まとめ

人は馬に癒され、馬は人に癒される社会

馬との良い関係が良い結果を生む

馬

身体的コミュニケーション
空間的コミュニケーション

人



南高愛隣会のホースセラピー現場

絢野 ナチン（社会福祉法人南高愛隣会）

社会福祉法人南高愛隣会では、1992年に乗馬療法の事業を始めました。長年の実践を通して、ホースセラピーを持続可能な治療手段にするためには、保険適用とするのが望ましいことに気づかされました。そして、保険適用を促すための実践成果の科学的検証とエビデンスの蓄積を目的に、2002年に「ホースセラピー研究センター」を設置しました。

南高愛隣会馬部署の沿革

1992	育成会を中心に「障害者乗馬療法」の取組みが開始
1993	田島良昭元理事長一行がモンゴル草原乗馬トレニングに体験参加
1994	職員のモンゴル研修 研修生の受入れ
...	ドイツ研修、専門家招聘
2022	通年全天候放牧 ホースセラピー研究センターを設置 目標：ホースセラピーサービスの医療保険適用を促す

2002年8月現在、当法人は雲仙、諫早、長崎の3か所にホースセラピー牧場を運営していました。2023年3月現在、牧場を雲仙と諫早2か所に統合し、馬8頭を7名の職員が飼育管理しながら、法人契約利用者を中心にホースセラピーサービスを提供しています。普段は1日10名〜20名、多い日に30名〜40名の利用者を受け入れています。2022年12月末日現在の年間営業実績は、延べ人数およそ4千800人です。

た。

ホースセラピーの現場

牧場：雲仙、諫早、長崎（～R4.8）
 介在馬：雲仙に6頭、諫早に2頭
 職員：コアメンバー4名 サブメンバー3名
 利用者：ふれあい・管理・騎乗 10～20名/日

セラピーサービス提供状況（単位：人、R4.12現在）			
	期間	曳馬	騎乗
雲仙	R4.4～12	102	1690
諫早	R4.4～12	308	707
長崎	R4.4～8	640	1348
合計		1050	3745

次は、2つの現場の状況をそれぞれ紹介します。一つ目は、2022年8月に閉鎖した「長崎市憩いの里あぐりの丘」でのホースセラピー現場です。この現場では、当初毎日午後3時から次の日の午前10時までの間、馬を馬房に入れて施設していました。

先行研究では、馬房の中に拘束された馬は通常行動と咀嚼回数が減るため、ストレスが蓄積する要因になりかねないと報告されています。

この現場では、馬の長時間拘束が上述の行動と咀嚼に弊害が生じるほか、敷料に排泄物が混じる不衛生な状態が続く、馬にはストレスフルな環境になっていたと思われまます。実際毎朝、馬房から出された馬が取り扱いにくく、いったん放すと逃げ回って捕まらない場面が度々ありました。一方、

毎日汚れた馬房の管理はスタッフおよび利用者にとっても心身的に楽な作業ではありませんでした。

馬を拘束後の馬房掃除
～2020.10



ケース1

場所：長崎市憩いの里あぐりの丘
 期間：2020年4月～2022年8月（29ヶ月）
 対象：TERRACEからふるのホースセラピー現場
 介在馬：2頭
 利用者：5名（A1-B1）、現場管理、週6日10:00～15:30

馬の自然性への配慮と活動現場の簡略化がもたらした変化

	ビフォー	アフター
馬	馬房拘束19時間/日 濃厚飼料のみの給餌 不安定	柵内24時間全天候放牧 粗飼料を中心とした給餌 穏やか
利用者	環境と作業流程が複雑 活動メニューが単一 活動内容の質が重い 馬と接する時間が少ない 馬への不信が強い	分かりやすい 選択肢が多様化 質量が軽減 馬と接する機会が多い 不信と不安ほぼ解消

そこで、動物福祉の考えに基づき、2020年11月から馬房を24時間開放し、広い柵との間を馬が自由に移動できる状況を作りました。同時に、馬の自然性に配慮し、これまで与えてきた濃厚飼料をイネ科の粗飼料に変更しました。その結果、馬の状態は以前より安定し、自由でありながら逃げ回ることがほとんどなくなり、利用者にも接しやすくなりました。そのおかげで、馬介在活動の選択肢が増えて、管理作業の質量が減り、以前に比べて現場で活動する利用者の雰囲気は穏やかに変わりました。



全天候放牧開始後
2020.11~2022.8



また、馬房を開放した結果、台風、豪雨、猛暑の日以外、馬はほとんど馬房の外側で過ごしていることが分かりました。排泄もほとんどが広い馬場で転々とすようになり、踏みつぶされることもないので、片付けしやすくなりました。木質の敷料が混ざっていないので、堆肥にして、馬場の緑化に活用するようになりました。

全天候放牧の実施による活動内容の変化

利用者の心身変化

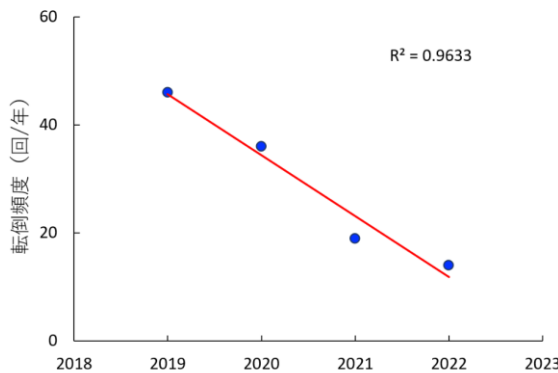
「TERRACEからふる」のケアラボが記載と現場支援員へのインタビューによる

	ビフォー	アフター
A	<ul style="list-style-type: none"> ・転倒と怪我が頻発 ・病気が多発し通院が多い ・眠気が強く、起きにくい ・通常活動に困難 	<ul style="list-style-type: none"> ▶転倒が大幅減少 ▶病気と通院が減少 ▶通常活動ができる ▶特記事項が増加
B	<ul style="list-style-type: none"> ・興奮による命令口調 ・興奮による常同行動 	▶安定状態
C	<ul style="list-style-type: none"> ・通院が頻繁 ・嘔吐が頻発 ・馬への悪戯 ・こだわりが強い ・協調性が低い 	<ul style="list-style-type: none"> ▶通院回数減少 ▶嘔吐が軽減 ▶悪戯が減少 ▶こだわりが軽減 ▶柔軟な対応への変化
D	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の馬が苦手 	▶苦手意識が緩和
E	<ul style="list-style-type: none"> ・馬活動に消極的 ・癩癧が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ▶馬活動への積極参加 ▶癩癧回数が減少

黒字は従来の項目
緑字は新たに増えた項目

環境整備	馬活動	対外営業	その他
<ul style="list-style-type: none"> ・馬房清掃 ・馬房づくり ・道具洗浄 ・ポロ捨て ・ポロ拾い 	<ul style="list-style-type: none"> ・餌づくり ・曳き馬 ・乗馬 ・放牧 ・馬装準備 ・馬匹移動 ・牧草集め ・牧草運び 	<ul style="list-style-type: none"> ・乗馬受付 ・客対応 ・受付準備 ・道具準備 ・ゲート開閉 ・曳き馬 	<ul style="list-style-type: none"> ・水やり ・堆肥作り ・堆肥撒き ・牧草の播蒔き ・敷料の袋詰 ・敷料運び ・飼料運び ・お弁当受取

A氏の転倒頻度の変化(2019-2022)



ケアラボの記載による集計

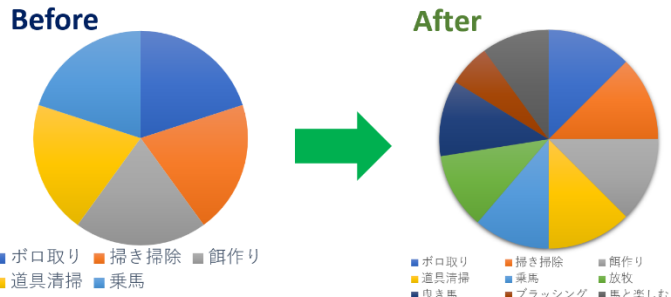
次は、諫早牧場の状況をご紹介します。この現場では、2021年8月に、馬が24時間開放した馬房と馬場の中で自由行動できる状況に移行しました。それから活動の内容が増えて、利用者は放牧や曳き馬など、自分

そんな中、従来の活動に消極的な利用者Aさんを、馬の放牧と曳き馬活動に誘ってみました。素直にに応じてくれるようになり、Aさんは持病のほか、睡眠時間の調整に課題があったため、日ごろから転倒することが多かったのです。しかし、2022年の半ばから馬介在活動に積極的に参加するようになってから、転倒回数の年間記録が顕著に減る傾向がみられるようになりました。馬介在活動への積極的な参加が、夜の睡眠にポジティブに働いたのではないかと考えられます。一方、異性への関心による問題行動が増えて、新たな課題が生まれました。

好みの役割を見つけたことで、これまでの特性に変化がみられるようになりました。

ケース II

場 所：諫早市福田町
 期 間：2021年8月～2023年2月（19ヶ月）
 対 象：TERRACEやまびこのホースセラピー現場
 介在馬：2頭
 利用者：4名、ふれあい・管理活動、週6日10:00 - 11:30



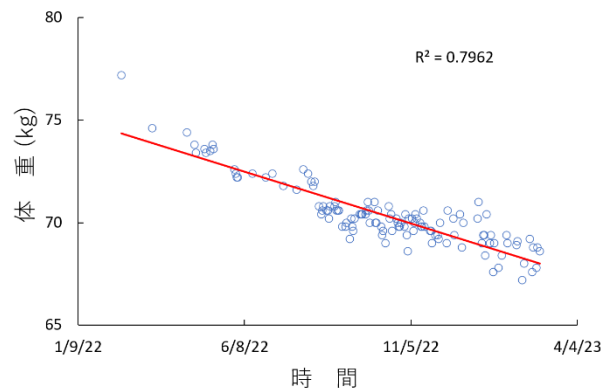
この現場では、馬に興味があるとは言えない利用者I氏がいます。仲の良い利用者Bさんは馬が好きなので、よく曳き馬をするけれど、IさんはBさんとその馬の後ろについて一緒に歩く場合が多いです。それが理由の一つと思われませんが、肥満気味のIさんの体重に減る傾向がみられました。

以上をまとめると、馬の自然性を理解し、それに配慮することで、馬介在活動の可能性がどんどん広がりに得ることに気づかされました。これからも、ホースセラピーの可能性を模索すると同時に、成果の科学的な検証結果を世の中にご紹介できるように現場の職員一同頑張っています。ご清聴ありがとうございます。

まとめ

- ・自然性に配慮した全天候放牧により馬が安定し、扱いやすくなった。
- ・安定した馬を介在し、現場の活動内容が多様化し、選択肢が増えて作業負荷が減少した。
- 👉 利用者の参加意欲と自信が向上し、現場の雰囲気が穏やかになった。
- ・馬介在活動は利用者の心身健康にポジティブに働く反面、新たな課題も浮上した。

馬介在歩行によるI氏の体重変化



参考文献

田島良昭 (2001) 『普通で場所で普通の暮らしを コロニー雲仙の挑戦 (2) はたらく編』 ぶどう社

局 博一 (2013) 馬介在療法の健康効果に関するオーバービュー、*J. Anim. Edu. Ther.*

林 良博 (1999) 『検証アニマルセラピー』 講談社

RDA Japan (2018) 『ホースセラピーガイドブック』

Department of Agriculture, USA. Pasture Management Guide for Horse Owners. https://www.nrcs.usda.gov/Internet/FSE_DOCUMENTS/nrcs142p2_022712.pdf

Matsui et al. (1989) Automatic Determination of Grazing and Feeding Behavior of Horse in Paddock and Stall. *日畜会報*

Paul McGreevy (2018) Equine Behavior. *ELSEVIER*

課 題

- ・ホースセラピーのサービスを受けやすい環境の整備。
- ・セラピー効果を検証するためのデータ収集と解析の強化。

ご清聴ありがとうございました

動物介在介入における動物福祉

野瀬 出 (日本獣医生命科学大学)

動物福祉の基本的な考え方と動物介在介入における動物福祉の具体的な手続きについて紹介します。

まず、今日的な意味での動物福祉の直接的なきつかけとなったのは、ルース・ハリソンの「アニマル・マシーン」という本だと言われています。イギリスの農用動物の飼育環境が劣悪であるという問題を提起したものです。それに対して、イギリス政府は動物学者のブランベルを委員長にした諮問委員会を立ち上げ、調査結果を「ブランベル・レポート」として公表しました。そのレポートの提言を受けて、翌年には農用動物福祉助言委員会が設置され、その後、農用福祉審議委員会と名前を変えていきますが、ここで重要な概念が作り出されました。

それが「5つの自由」です。これは、現在の動物福祉の基本原則となっている考え方ですが、5つの自由については何回か改定が重ねられています。ブランベル・レポートにおける5つの自由は空間的な動物の動きに特化したようなものになっていましたが、現在使われている1992年に定められたものは、正常な行動を表現する自由、恐怖と苦悩からの自由といった項目が加えられており、ブランベル・レポートと比較すると、動物の主観や本来の行動というものが含まれているのが特徴です。

当初は、農用動物を対象としたものでしたが、現在はそれに限らず、実験動物や伴侶動物、展示動物などもこの対象となっております。

5つの自由: 動物福祉の基本原則

ブランベル・レポート(1965)の5つの自由:

- ①立ち上がること、②横たわること、③回ること、④身繕いすること、⑤四肢を伸ばすこと

農用動物福祉審議会(1992)の5つの自由

- 飢えと渇きからの自由 (給餌・給水の確保)
 不快からの自由 (適切な温度・湿度、風雨・炎天下を避ける、適度な広さ)
 痛み、怪我、病気からの自由 (予防、診断、治療の提供)
 正常な行動を表現する自由 (異常行動を発現することがない環境)
 恐怖と苦悩からの自由 (精神的苦痛、ストレスを取り除く)

※現在は農用動物だけではなく、実験動物、伴侶動物、展示動物等にも適用されている。

動物福祉とは

1960年代のイギリスにおいて、ルース・ハリソンの著書「アニマル・マシーン」(1964)がきっかけとなり、農用動物の劣悪な飼育環境が社会問題化。

→ 苦痛を伴う外科的処理、薬剤過剰投与、過度の密飼

英国政府は諮問委員会(ブランベル委員会)を立ち上げ、調査を実施し、ブランベル・レポートを公表(1965)。翌年には、農用動物福祉助言委員会(FAWAC)が設置される。

→1979年 農用動物福祉審議会(FAWC)

→2011年 農用動物福祉委員会(FAWC)

One Welfare

One Medicine: “人と動物の医学に境界線はない、あつてはならない”(Rudolf Virchow, 1856)。Calvin Schwabeが正式に定義(1984)。

One Health: 人、動物、環境は相互に関連しており、様々な問題の起源を共有している(人獣共通感染症など)。「マンハッタン原則」(2004)

One Welfare: One Healthの考え方を推し進めたもの。人と動物の双方のウェルビーイングを考慮する(動物への虐待→人間への虐待)。

(Lindenmayer et al., 2021)

「One Welfare」について説明します。最初に病理学者のルドルフ・ウィルヒョウが「人と動物の医学には境界線はない、あつてはならない」と述べて「One Medicine」という考え方を示しました。それが発展したものが「One Health」になります。野生動物の生息地域が減少することで、人と動物が関わる機会が増え、様々な感染症の一因となっています。そして、One Healthをさらに推し進めたのが「One Welfare」になります。動物への虐待は、人間への虐待に発展するため、動物への虐待を防ぐことが人間の虐待防止にもつながると言われています。

ピニロスという人がOne Welfareの考え方を整理しています。経済的な面だけを優先すれば、動物福祉は単なるコストの増加でしかないが、人間・動物・環境の相互作用の中で考えることで、**全体的かつ解決志向的な新たなアプローチ**を生み出す(Pinillos et al., 2016)。

次に、動物介在介入について説明します。動物介在介入は、AAI (Animal Assisted Intervention)とも言われます。目的があつて、何らかの意図で動物を取り入れ、構造化された中で動物と相互作用をするものです。現在のAAIの分類は、IAHAIO (人と動物の関係に関する国際組織) という国際組織が提唱しており、「動物介在療法」、「動物介在教育」、「動物介在活動」、「動物介在コーチング」の4つに分類されています。動物介在活動以外に関しては、専門家が行う介入ですので、その介入過程が記録・評価されています。

One Welfare

経済的な面だけを優先すれば、動物福祉は単なるコストの増加でしかない。しかし、人間、動物、環境の相互作用の中で考えることで、**全体的かつ解決志向的な新たなアプローチ**を生み出す(Pinillos et al., 2016)。

- 動物と人間への**虐待**の減少
- 動物が関わる**社会問題**への対応(多頭飼育崩壊)
- **農業動物**の福祉→生産性、食の安全、従業員の福祉
- 受刑者が保護犬に飼い主になる(再犯防止)
- 動物福祉→農業の持続可能性(**食料安全保障**)
- **生物多様性**の増加(自然環境→精神衛生向上)

動物介在介入とは

動物介在介入 (Animal Assisted Intervention: **AAI**)

目的が明確な構造化された介入であり、健康、教育、福祉サービスに意図的に動物を取り入れたもの。人や動物の専門家が実施する(IAHAIO, 2018)。

【AAIの分類】

- 動物介在**療法** (Animal Assisted Therapy: AAT)
 - 動物介在**教育** (Animal Assisted Education: AAE)
 - 動物介在**活動** (Animal Assisted Activity: AAA)
 - 動物介在**コーチング** (Animal Assisted Coaching: AAC)
- ※AAA以外では介入過程の**記録・評価**が必要

AAIに参加する動物の条件について、まず健康で人との相互作用に適した家畜動物のみが対象となっています。ただし、One Welfareの考え方から保護された野生動物の世話などをAAIに取り組みこ

には、動物介在介入について説明します。動物介在介入は、AAI (Animal Assisted Intervention)とも言われます。目的があつて、何らかの意図で動物を取り入れ、構造化された中で動物と相互作用をするものです。現在のAAIの分類は、IAHAIO (人と動物の関係に関する国際組織) という国際組織が提唱しており、「動物介在療法」、「動物介在教育」、「動物介在活動」、「動物介在コーチング」の4つに分類されています。動物介在活動以外に関しては、専門家が行う介入ですので、その介入過程が記録・評価されています。

もう一つの条件として、同じ動物種であっても、個性があるため、**個体評価**を行い、適性がある個体のみを参加させます。

AAIに参加する動物の条件②

同じ動物種であっても、個体ごとに性質(**行動特性**)が異なる。専門家による**個体評価**を実施し、適性がある個体のみが活動に参加する。

特に**行動が安定**しており、**人と相互作用**することを**好む**傾向が重視される。

トレーニングを受け、活動に必要な行動を獲得する(犬の“待て”)。一方で、**ストレス状態**にある時に、それを表出することも重要(痛みを感じた時に鳴く)。

AAIに参加する動物の条件①

健康で人との相互作用に適した**家畜動物**のみ。

野生動物は、人獣共通感染症の危険性や動物福祉的問題が生じる可能性が高い。

※イルカセラピー: 他の動物を用いたAAIよりも有効であるという科学的根拠はない(Whale and Dolphin Conservation Society, 2007)。

ただし、**保護された野生動物の世話**等をAAIに取り入れることは可能。

人に対する条件もあります。AAI前に事前調査を行います。介在動物と参加者とのミスマッチがあると、動物福祉を妨げる要因となります。

参加する人の条件

AAI前に**インターク**(事前調査)を実施し、参加者の情報を収集する。

動物アレルギー、動物嫌い(恐怖症)、動物との不快な体験、文化的(宗教的)背景、動物虐待の経験

介在動物と参加者の**ミスマッチ**は、動物福祉を妨げる。

セッション実施時の留意点としては、開始前に動物の健康・衛生状態を確認すること、安心して過ごせる環境を整えるということが重要です。特に、訪問活動の場合は、普段動物が生活している場所と違う場所での活動となるため緊張しますし、長距離の移動が必要な場合は、輸送ストレスもかかるので注意が必要です。

さらに、活動時間を設定し、十分な休憩時間をあらかじめ決めておくこと、セッション中の動物のストレスサインを見逃さないことです。普段から動物を観察し、その個体の特性を知っておくことで、ストレスサインを見逃さないようになります。

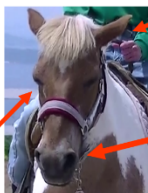
表情に表れるストレス



放牧時のあやの

<https://www.animalfac.com/>

顔面の筋肉の動きに基づき表情をコード化するシステム。表情を客観的に捉えることが可能。



引き馬時のあやの

	引き馬	給餌延長
AU101(内眉をあげる)	↑	↑
AU143(閉眼)	↑	
AU145/47(まばたき)		↑
AD38(鼻腔の拡張)	↑	↑
EAD104(耳の外転)	↑	

佐藤理沙子・松野みずき、2022年度卒業論文

セッション実施時の留意点

セッション開始前には、動物の**健康・衛生状態**を確認するとともに、動物が**安心して過ごせる環境**を整える(訪問活動では特に注意)。

過度の負荷にならないように**活動時間**を設定し、十分な**休憩時間**を設ける。

セッション中は常に動物をモニターし、**ストレスサイン**を見逃さないようにする。普段から動物を観察することで、その個体の特性を把握しておく。

現在、私の研究室では、動物の表情の研究を行っています。AnimalFACSという顔面筋の動きに基づいて、表情をコード化するというシステムがあり、これによって客観的に表情をとらえることが出来ます。昨年(2022年)5月に馬の表情の映像を撮影し、観察しました。曳き馬時には耳が後ろに倒れる耳の外転(EAD104)、目を閉じたり、目が細くなる(AU143)、鼻腔の拡張(AD38)、内眉が上がる(AU101)というような表情が観察されました。

ストレスサインが生じた際には、ストレスゾーンに基づいて対応します。ストレスゾーンには3つのゾーンがあります。まずは「グリーンゾーン」です。リラックスしたストレスのない状態なので、この状態でAAIを実施することが最も望ましいとされており、ただし、不測の事態が発生した場合や、疲労などが出ると、「イエローゾーン」に移行します。「イエローゾーン」は、ストレスサインが見られ、注意が必要な状態です。ハンドラーが近寄って声をかけたり、なでたりなどして対応する必要があります。それによって安心させることが出来たら、セッションは継続可能ですが、「レッドゾーン」に移った場合は、動物を離脱させる必要があります。「レッドゾーン」はストレス反応が顕著に表れている状態で、ハンドラーがいくら対応しても、動物が落ち着くことが出来ない状態です。そのような状況では、噛みつきたり、ひっかかりたりなど、参加者に怪我をさせてしまったり、事故が発生するリスクが高くなるので、「レッドゾーン」に入ったら、すぐに動物を離脱させます。

それから、当然ながら、動物に怪我や病気があることが明らかになった場合には、直ちにAAIを中止し、獣医療機関を受診させます。また、老化に伴う変化として、だんだん体力が落ちてきて、活動レベルが

AAIへの参加中止

動物の怪我や病気が明らかになった場合は、ただちに AAIへの参加を中止し、獣医療機関を受診させる。

老化に伴う体力の衰え、活動レベルの低下が見られた場合は、段階的に活動への参加頻度や時間を減少させる。→引退

最終セッションは卒業式(お別れ会)とし、動物の写真やお別れカードを作成し、参加者に思い出を残す。

ストレスゾーン

(AAAIP, 2022)

- 1) **グリーンゾーン**: リラックスした、ストレスのない状態、活動するのに適している。急に大きな音がしたり、疲れたりすると以下のゾーンに移行する。
- 2) **イエローゾーン**: ストレスの徴候が見られ、注意が必要。ハンドラーの対応によってはセッションを継続可能だが、レッドゾーンに移行した場合は動物を離脱させる。
- 3) **レッドゾーン**: ストレス反応が顕著に表れている。ハンドラーが対応しても、平静にならない。噛みつきやひっかきのような望ましくない行動が出現する可能性が高い。すぐにその場から動物を離脱させる。

下がり、あまり人に近づかなくなってきた場合には、段階的に活動への参加頻度を減らし、最終的には引退させます。その場合には、今まで触れ合っていた動物に急に会えなくなると、参加者に喪失感が現れますので、お別れ会などをして、人間に対する配慮というものも必要になります。

環境エンリッチメントは、動物園から出てきた考え方です。動物園生物学の父と呼ばれるハイニ・ヘイダーは「動物園動物にとって最大の問題は、飼育下の動物にすることがないことである」と言っています。そのためと同じところを行ったり来たりする常同行動や柵舐め、糞食、吐き戻しといったことが生じます。その対策として、環境を豊かにする「環境エンリッチメント」というものがあります。これは動物園で始まった方策ですが、今は展示動物以外の動物にも適用されています。

環境エンリッチメントには、採食・感覚・空間・認知・社会の5つのカテゴリーがあります。採食エンリッチメントというのは、単に食べ物を与える、すぐに食べられる状態を出すのではなく、ひと手間かけないと食べられない状態にします。その方が動物が好む傾向があることが知られているからです。感覚エンリッチメントは、色んな動物の音が聞こえる、匂いがする、といった感覚刺激を与えることです。空間エンリッチメントは、水場がある、日影が用意されている、隠れる場所がある、という環境を与えることです。認知エンリッチメントは主にトレーニングがそれに相当します。社会的エンリッチメントは、もともと群れで暮らしている動物は、飼育下においても群れで飼育した方がよいということですが、必ず動物の欲求が満たされる必要はありませんが、欲求に基づいて行動を選択できる機会がある、欲求を満たすことが出来る可能性が環境の中に存

まとめ

One Welfareの考え方が浸透してきており、人と動物、環境の状態を一体的に守ることが重視されている。

AAIにおける動物福祉への配慮は、動物が安心して活動に参加できるだけなく、セッション中の事故のリスクを低減させ、AAIをより有益なものとする。

放牧は、効果的な環境エンリッチメントである。

ご静聴ありがとうございました。

在しているということが重要です。One Welfareの考え方が浸透してきて、人・動物・環境の状態を一体的に守ることが重要視されています。AAIにおける動物福祉に配慮することとは、単に動物にとって安心できる環境を用意するだけではなく、その参加者にとっても事故のリスクをなくしたり、AAIの効果を最大限に発揮するという点でもあります。馬の放牧というのは効果的な環境エンリッチメントと考えることが出来ると思われれます。

馬とダウン症者の関わりから考える One Welfare

柿沼 美紀（日本獣医生命科学大学）

ダウン症者の特性

- 合併症 心疾患、糖尿病 など
- 身体 筋緊張低下
- 認知 訴えがすくない（空腹、眠いなど）
言語発達はゆっくり

私は公認心理師で、小児科で子どもの心理相談をたくさん受けており、最近私が働いているところにダウンセンターというものが開設されました。ダウン症者の特性としては、合併症、心疾患、糖尿病などがあるというものはよく知られています。また、筋緊張の低下もあり、知的な遅れがあることで発達もゆっくりであるということも知られていますが、実は「訴えがすくない」というのが大きな特徴です。結構長い間寝ている、空腹の訴えが少ない一方で満腹の訴えも少ない、など一般的に訴えが少ないというのが特徴のようです。

社会生活

- 幼児期 保育園、幼稚園等（統合保育）
- 児童期 特別支援学級、支援学校など
- 思春期 支援学校 就労に向けての訓練
- 青年期 一般就労、作業所、生活支援所

そのため、幼児期はとてもいい子で、問題がないように見えます。小児科に来て、健康上の相談はあっても、「静かである」という相談はほとんどありません。それが問題であると思われなため、嫌なことを「言う」ということがないまま過ぎていきます。そのため、社会性の問題というのがあまり見えてこなくなります。

青年期における課題

- 社会生活における不適応
- 周囲の理解と本人の能力のギャップ
- 困難さの伝達が難しい
- 集中力、体力の持続

があるダウン症のお子さんは、このあたりから不適応を起す傾向があります。思春期になると就労に向けての訓練に入り、訓練はある程度できますが、青年期になって一般就労もしくは作業所・生活支援所での仕事・生活が始まると、今までと環境が違うためになかなかついていけないということが起きやすくなります。

ダウン症のお子さんは、保育園では穏やかに過ごすことが出来ます。児童期には通常級に行く方もいますが、学習面でついていけなくなり、支援学級・支援学校に行くことも多いです。自閉傾向

行動に見られる変化としては、職場に行かない、作業所へ行かない、行くのを嫌がる、トイレから出てこない、トイレを詰まらせる、お風呂から出てこない、といういわゆる問題行動が出てきます。

意欲が減退し、以前は出来ていたことをやらなくなり、活動範囲が狭まり、発話も減少したり、人との関りが怖くなり、避けるようになり、結果的に運動不足となり、体重増加という問題も出てきます。

- 仕事場、作業所へ行かない
- 家庭内での問題行動
- 意欲の減退
- 発話の現象
- 人との関わりを避ける
- 運動不足
- 体重増加

行動に見られる変化

馬の世話は、言葉を介さない関わりです。その代わりに、ボディーランゲージが大事です。南高愛隣会のダウン症利用者にとっては、適度な運動にもなります。まず、家・施設から出る、様々な作業をすることで人との関わりも出てきます。

馬の世話

- 言葉を介さない関わり
- 穏やかな性格の馬
- 適度な運動
- さまざまな作業
- 人との関わり



施設のスタッフの特性としては、一般の福祉の知識に加え動物福祉に深い理解がある人達が行っています。そもそも非常に熱心な方が集まっていることもあり、スタッフは馬に優しく、当然人にも優しくなります。One Welfareを支える環境としては、人とそこに介在する動物の福祉の充実が必要です。

南高愛隣会の特徴

- 福祉を重視した馬の飼育管理
 - 24時間放牧
 - 放牧を理想とする飼育管理者
- 障がいのある人の作業
 - 乗馬
 - 馬の世話
 - 馬房管理
- ワンウェルフェアを支える環境
 - 馬の福祉も人の福祉も理解したスタッフによる支援
 - 24時間放牧が可能な環境



スタッフの特性

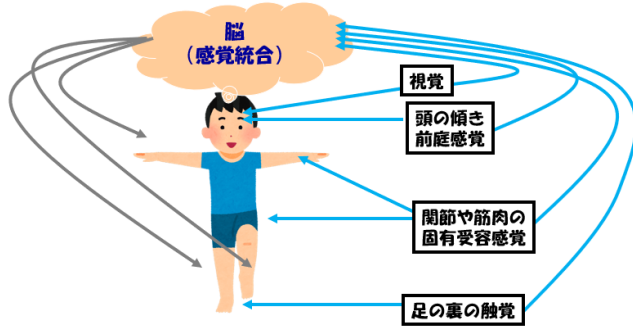
- 動物福祉の概念
- 行動観察能力
- 穏やかな性格

感覚統合と発達障害

岩永 竜一郎 (長崎大学)

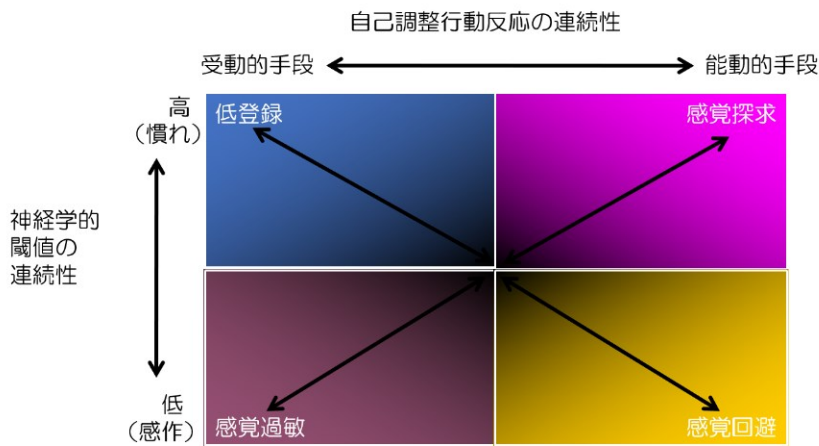
感覚統合(Sensory Integration; SI)とは

外界や身体内部から入ってくる様々な感覚刺激を適切に処理し適応行動に結びつける際の脳の中でのプロセスをいう



私は、発達障がいを専門にしており、その中で感覚統合という考え方を治療に用いています。感覚統合 (Sensory Integration) は、アメリカから入ってきた考え方で、私たちは常に体内や外界の情報を取り入れ、そして適応行動を起こしています。例えば、片足立ちするときは、視覚情報で周囲のまっすぐしたのを見、傾きや揺れといった感覚で自分の頭の位置を確認して、関節や筋肉を意識し、足の裏の触覚などを取り入れてバランスを取ります。その際に脳内で起こるプロセスのことを感覚統合と言います。

感覚調整障害



発達障がいがある子ども達は様々な問題を持っており、行動や対人関係の問題も持っている方もいます。一方で感覚統合の問題も持っている場合も多いです。自閉スペクトラム症の子ども達

感覚統合は、五感と言われるもの以外に、前庭覚や固有受容覚というのを重視します。前庭覚は、めまいやスピードを感じる感覚で、固有受容覚というのは、筋肉の受容体で受け止める感覚です。自分の体がどう動いているのか、どんな位置にあるのか、という感覚を非常に重視します。

は、対人関係とコミュニケーション障害を持っていますが、それ以外にも感覚の問題もあることが多いです。行動が受容的で閾値が高い場合は、たくさんの刺激が入ってこないという反応しないということですが、その場合は、名前を呼ばれても振り向かないといった状態です。能動的で閾値が高い場合は、感覚探求と言って、刺激を過剰に求める行動を起こします。自閉スペクトラム症の子どもが一人でくるくる回る行動をすることがありますが、それがこれに当てはまります。受動的で閾値が低いものが感覚過敏で、セーターを着るとチクチクして耐えられないといったことがありますが、能動的で閾値が低いのが、感覚回避で、音楽室がうるさくて逃げるといった行動をするのがこれになります。

自閉スペクトラム症の子どもには「過反応」というのがよく見られ、様々な感覚において過敏性が見られることがあります。また、逆の反応に見えるかもしれませんが、「低反応」と言っていて、刺激に対して鈍い反応(鈍麻)、例えば名前を呼んでも振り向かない、といったことがあります。これは「鈍い」というよりは、むしろ「社会的情報への反応が見られない」という捉えの方が正しい言い方かもしれません。また、触られても反応しない、痛みを訴えないということもあり、かなり感覚の捉え方が違う気がします。そして、物を咬む、クルクル回り続ける、壁などを叩く、頭を打ち付けるといった行動をする「感覚探求」です。自傷行為のようなことが見られることがあります。それが感覚を求めてやっている方もいます。こういったものが自閉スペクトラム症に見られます。

感覚探求

- 物を咬む
- くるくる回り続ける
- 扉や壁をドンドン叩く
- 頭を床に打ち付ける
- 他の人にべたべた触る
- 水遊びをやめない
- キラキラ光る物を見つめ続ける

低反応

- 呼んでも振り向かない
- 触られても反応しない
- 痛みを訴えない
- 目が回らない

過反応

- 赤ちゃんの泣き声を嫌う
- 嫌いな音に耳ふさぎをする
- 他の人の接触を嫌う
- 歯磨き、耳掃除を極端に嫌がる
- 特定の感触の洋服しか着ない
- べたべたしたものに触れない
- 高い高いを怖がる
- 蛍光灯を嫌う
- 特定の味・臭いを嫌う

象限スコアとVineland Adaptive Behavior Scale IIのスコアの相関

Quadrant	VABS-II-J Adaptive Behavior					VABS-II-J Maladaptive Behavior		
	Communication	Daily Living Skills	Socialization	Motor Skills	Adaptive Behavior Composite	Internalizing	Externalizing	Maladaptive Behavior Index
低登録	.12	.10	.21*	.15	.18	-.45***	-.30**	-.44***
感覚探求	.12	.02	.13	.06	.10	-.30**	-.38***	-.49***
感覚過敏	.15	.10	.23*	.16	.20*	-.40***	-.42***	-.50***
感覚回避	.24*	.19*	.39***	.19*	.32***	-.57***	-.51***	-.59***

* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$.

このような感覚の問題というのは、問題行動とつながりやすいことが分かっています。Vinelandの適応行動尺度というアセスメントの結果の不適応行動の Maladaptive Behavior と感覚処理の関係をみると、適応行動はそれほど相関が強くないことに対して、不適応行動との相関が強いことが分かります。そのため、他害や自傷行動といった逸脱行為は、感覚の問題がかなり絡んでいます。南高愛隣会の利用者を見ていると、乗馬をしていた方が、しなく

なった時に調子を崩し、不適応行動が増えると感じるので、そういった時に初めてホースセラピーの効果に分かることもよくあります。

発達性協調運動症 Developmental Coordination Disorder (DCD)

- 麻痺がないのに不器用
- 姿勢が崩れやすい
- 文字の形が整わない
- 体育、工作などが苦手

発達性協調運動症というのは、他の発達障がいと併発しやすいというのがあります。不注意や多動が見られる ADHD の 5.2% に発達性協調運動症が見られ、DAMP と呼ばれます。そのような子どもには、協調運動の育成というのが非常に大事になります。

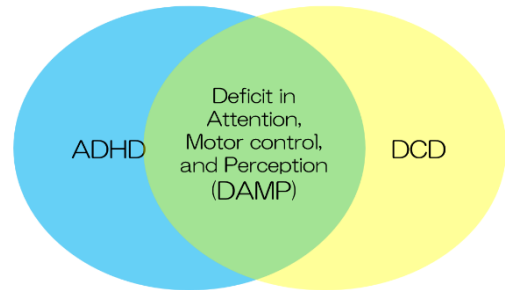
自閉スペクトラム症の中にも8割は明らかな運動面での問題が見られます。1割に境界級の問題が見られることが分かっており、協調問題というのが見られやすいです。

自閉症スペクトラム障害(ASD)児の不器用 注意欠如・多動症(ADHD)児の運動の問題

•ASD児の79%に明らかな運動面の問題（5パーセンタイル以下）、10%に境界級の問題（15パーセンタイル）

(Green et al, 2009)

ADHD児の55.2%に発達性協調運動症 (Watemberg et al. 2007)



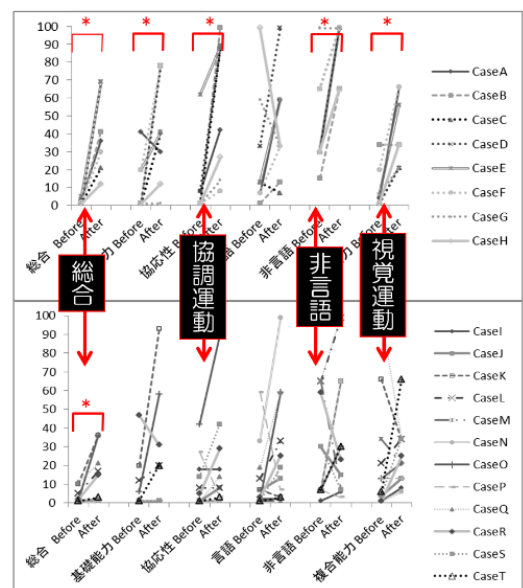
自閉ベクトラム症の方に話を聞いてみると、自分のボディイメージがよくわからないようで、背中があることは知ってはいるが、普段は分からないといった感じで、ボディイメージがかなりあいまいな方が多いです。そのため、このような方はかなり強い刺激を求めているので、乗馬のようなかなり強い前庭刺激というのは、自分の体を確認できる非常に良い機会になると思います。

このような方々に私たちは感覚統合療法というところを行うことがあります。まず、感覚過敏に対しては、無理はせずに不快な刺激は遠ざけるようにして行います。ただ、揺れの感覚は、最初は受け入れられなくても、徐々に段階を踏んで揺れを体験すると改善していきます。

刺激を過剰に求める感覚探求への対応としては、まず積極的に感覚刺激をしつかり入れてから、その後徐々に落ち着きのある行動を入れていくようにしていきます。トランポリンやボールプール、ブランコなどを室内で行っています。

触覚の認識が苦手な不器用な方には、触覚遊びをしたり、ボディイメージが弱い方には、狭いところを潜り抜けたり、複雑な体の動きを体験してもらっています。また、揺れながら球を投げる、揺れながら乗り移るといったタイミングを合わせる必要がある運動も入れます。自閉スペクトラム症があり、かつ不器用な方は、他人との協調運動が苦手ですので、他の人の動きに合わせて協調するようなことをやっています。

私が行った研究では、感覚統合療法は、一般的な集団療育に比べて、協調運動、非言語、視覚運動に効果があることが分かりました。



感覚統合療法 (高機能ASD児=8名)

集団療育 (高機能ASD児12名)

世界の効果研究をまとめたデータを見ると、感覚統合療法は、感覚と運動スキルの改善に効果が見られ、レビュー研究においては、遊び、感覚・運動、言語スキル、社会スキルの援助に役立つことが明らかに。つまり、感覚運動や社会性、遊び方にも効果があるということが分かっています。感覚統合というのは、昔であれば自然の環境の中で体験していたことを部屋の中で出来るようにしているという感じなので、私の推測では、自然とできるようなところに連れていき、毎日体験が出来れば同じような効果が出るのではないかと考えます。

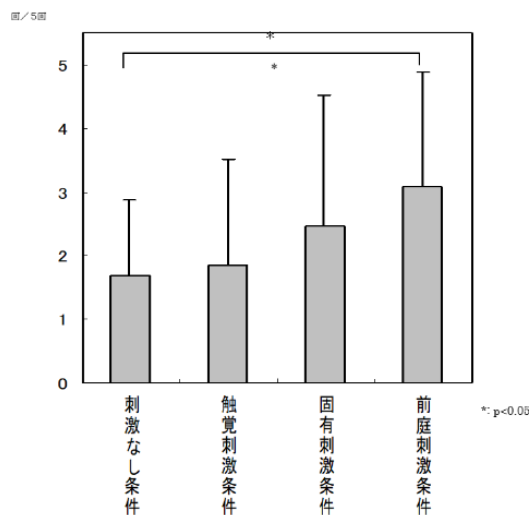
Iwanaga et al.: Pilot study: Efficacy of sensory-integration therapy for Japanese children with high-functioning autism spectrum disorder. Occupational Therapy International. 2014

感覚統合療法に対する評価 (2017年、2018年)

- 感覚統合療法は感覚と運動スキルの改善に効果あり。
- Weitlauf AS, Sathe N, McPheeters ML, Warren ZE: Interventions Targeting Sensory Challenges in Autism Spectrum Disorder: A Systematic Review. Pediatrics. 139(6). pii: e20170347. 2017
- レビュー研究で感覚統合療法は、遊び、感覚 - 運動、言語スキル、社会スキルの援助の軽減に役立つことが明らかになっている
- Schaaf RC, Dumont RL, Arbesman M, May-Benson TA. Efficacy of Occupational Therapy Using Ayres Sensory Integration®: A Systematic Review. Am J Occup Ther. 72, 2018

私たちは、自閉スペクトラム症の子どもの社会性を育てるために感覚刺激を使うことがあります。かなり重度の自閉症の子どものみを対象として、そのまま話しかける、体に触れて話しかける、体を動かして話しかける、という実験を行いました。5回そのまま話しかけた場合は、アイコンタクトが1回程度でした。体に触れて話しかけると、少しアイコンタクトが増えて、関節を引く張るとさらに増えて、ブランコで動かすと5回中3回アイコンタクトが取れました。このことから、体に働きかけた方が反応があるということが分かります。その理由は、一つに強烈だから反応する、というのがあります。一方で分かりやすさもあります。言葉というのは言語理解能力がないと楽しめませんが、体の感覚というのは言語理解力が低くても体験できます。体の

アイコンタクトへの感覚刺激の影響



感覚刺激は知的能力にそこまで影響しないので、体の感覚、振動感覚というのは、適合障害が重い方や自閉症が重い方にも楽しめますし、分かりやすいというものもあります。そのため、私たちは感覚刺激をコミュニケーションを引き出すための褒美として用いることもあります。

乗馬は、前庭刺激、固有受容刺激、感覚刺激などが豊富に入ります。これが重度の自閉症や重度の知的障がいがある方にも分かりやすい、楽しめる刺激になると思います。感覚探求が強い方にも乗馬で十分な刺激が得られますので、生活が安定してくるのではないかと思います。乗馬にどこまで効果があるのかはすぐには分かりませんが、しばらく休んで体調を崩したときに効果が分かる方もいます。セラピーを始めた時に経過を観察することも大事ですが、できない期間の経過観

発達障害の理解と馬とかかわる活動

Autism Spectrum Disorder, ASD児：

- 日常的に多動性が観察される
- 前庭刺激に対する低反応性を有している
(回転刺激直後の眩暈やふらつきなどがなく、閉眼立位可、歩行可)
- 乗馬では、常歩では、笑顔は観察されず、あくびが観察された、速足で笑顔が観察され、繰り返しの速足を求めてくる



速足で笑顔になることから、速足により得ることの可能な感覚刺激を提供することが有効と考えられる

石井孝弘先生ご提供

察が意外と効果を見るためには重要ではないかと思えます。乗馬は、バランス、筋緊張、運動企画などに効果があるので、すごく大事だと思います。また、乗馬というのは乗るだけではなくて、馬の世話もとても大事で、その際に馬とのコミュニケーションが取れます。これは言葉を介さない自閉症の子どものにも分かりやすく、とても良いと思います。ただし、乗馬の活動の際には、利用者の特性を理解することが大事です。これは、帝京大学の石井孝弘先生が仰っていることですが、うまく動物を活用する、動物に入ってもらおうセラピーをやっていく時に、その良さを活かしていく過程で必ず利用者の特性も見極めて、それに合わせて利用していかなければならない、ということなのです。

発達障害の理解と馬とかかわる活動

- 発達障害においては、診断名から支援方法を決めることはできない
- 個々の心身機能の把握とそれに対する具体的な支援方法の立案が重要
- 「対人関係の障害」「コミュニケーションの障害」「パターン化した興味や活動」等、具体的な原因は異なることは多々ある
- 可能な限り、対象者ごとの状態の把握と具体的な支援方法の立案が重要といえる

石井孝弘先生ご提供

Autism Spectrum Disorder, ASD児：

- 日常的にこだわり行動が観察される
- 前庭刺激に対する反応性はやや過敏と思われる反応性を有している
が
（回転刺激中に姿勢保持が困難となり、回転停止後につばを飲み込むような様子が観察された、嘔気の訴えがあった）
- 乗馬では、騎乗後常歩で、表情が不安そうであったことから、サイドウォーカーが、大腿部を圧迫しながら騎乗することで、不安は解消された様子であった。
常歩のみで終了



常歩でも不安な様子が観察されたので、児の大腿部への触圧刺激で不安に対応

石井孝弘先生ご提供

One Welfare 動物介在療法の可能性



【司会】

門司 和彦（長崎大学・教授）

【パネリスト】

局 博一（東京大学・名誉教授）

絢野 ナ子（社会福祉法人南高愛隣会・室長）

柿沼 美紀（日本獣医生命科学大学・教授）

野瀬 出（日本獣医生命科学大学 准教授）

岩永 竜一郎（長崎大学・教授）

【司会・門司】

パネル・デイスカッションの司会の門司です。私は、アフリカでうなぎ症候群という子どもものてんかんのケアに関わっています。現場では、ケアの難しさや重要性を考えさせられることが多いです。動物が介在することによって、利用者、家族、ケアをする方たちのウェルビーイングがよくなれば素晴らしいと考え、今回のパネルの司会をお引き受けしました。本パネルでは、今後のホースセラピーがOne Welfareの中でどのように発展していけるのかを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

■ 馬と人間の関係

【門司】

まず、パネルの皆様に、会場からの質問に答えていただきます。最初の質問は、「人は馬に癒されるけれども、馬は疲れるだけではないのか。馬のメリットは何でしょうか」という質問です。

【局】

どちらかというと、人間中心、人間の都合という感じがしますが、実は馬は生きていくうえで、社会との関わりも大事な要素で、人間社会からルーティンワークを与えてもらうことによって、生き生きと生きていけて、寿命が伸びます。ある程度、馬に刺激を与えて、馬に働いてもらう、それが馬にとっても喜びを感じるようになると思います。

【絢野】

現場で気づいたことですが、我々が馬の仲間になることは可能かと思います。今の全天候放牧という飼育条件の中で、馬たちは自分の都合で人間に寄ってきます。そのため、私たちの都合だけの関係ではなく、彼らが人間を必要とするときに、人間が近くにいるという状況では、馬の方にもメリットがあります。お互いに与えあっていると感じます。

【門司】

馬は賢い動物で、自分が必要とされているということを理解しているのではないかと思えます。年を取った馬、走れなくなった馬が（処分されるのではなく）障がいを持つ人たちと一緒に穏やかに生きるということは、本当にいいことだと今回、感じました。

別の質問ですが、「感覚統合の訓練を行う際、馬以外の動物を使う例はありますか。また、有効と思われる動物はありますか。」

【岩永】

感覚統合治療法として、動物を導入している例は私が知る限りはありません。ただ、家庭で犬や猫を飼っており、触覚的な関りを求めて、ペットを撫でるといことはよくありますし、感覚統合の視点から見ても良いと思います。しかし、馬ほどの刺激を与えてくれる動物は他にはないのではないかと思います。

【柿沼】

社会生活に不適合を起こしやすく、周囲の人と軋轢が出てくる中で、馬というのは大きさを

であったり、安定感ということでも良いのではないかと思えます。それから、馬を連れて歩くことや、馬とともに体を動かすといった穏やかな関わり方といった面でも、馬がベストというわけではありませんが、馬は良いと思います。

【門司】

次の質問です。動物介在療法AAIの中でコーチングという分類がありますが、具体的にどのような内容の活動で、それにかかわる専門家たちはどのような資質・能力が求められるのでしょうか。

【野瀬】

2018年にIAHAIIOのホワイトペーパーが改定され、そこで初めてコーチングが入ってきました。日本ではまだあまり普及していませんが、コーチングに関する書籍は出版されており、主にビジネスの分野で指導することがメインとなりますが、対人関係、社会的感情の扱い方などの指導を通じて目標達成を促すことが仕事になると思います。これから、日本でも色々な研究を重ねて開発されていくのではないのでしょうか。

■ 発展のための研究データ

【門司】

今後、ホースセラピーを広めていく上で様々な課題がありますが、その一つにどのような研究データを出せばよいか、があります。これについてはナチンさん、いかがでしょうか。

【絢野】

今、私たちが参考に行っているのは、ホースセラピーに関して、国際的にどのような研究が行われているかということです。身体的なセラピー効果と、メンタル面でのセラピー効果をどのような指標をもって、どのように検証していくかというの大きな課題ではないかと思っています。海外では研究が行われているようですが、様々な観点からの情報交換を共同で

行えればと考えております。

【門司】

馬の行動に関して、放牧をすることによってホースセラピーに使いやすくなった、というデータはあるのでしょうか。

【局】

そのデータはありませんが、私の感覚では、馬がリラックスすると、いい結果が出るだろうということは予想されます。

【野瀬】

残念ながら、データは見たことがないのですが、私たちも実際に牧場に入って、放牧が馬介在療法に良いのではないかと感じたことはありましたので、そこから仮説を構築して、実際にデータを取って検証していくと、新しい研究のきっかけになるのではないかと思います。

また、環境エンリッチメントに関して、動物介在『療法』については難しい感じがありますが、動物介在『活動』や『教育』に関しては、色々な動物園で新しい取り組みや、環境エンリッチメントに関する取り組みを成功させている事例もありますので、それも参考になるのではないかと思います。

【門司】

次に、利用者にとってどれだけ意味があるのか、ということですが、利用者の個性・個体差がある中で、科学的なデータをどう出していくのかも課題だと思っています。いかがでしょうか。

【局】

私たちもそこに一番関心があります。利用者もそれぞれ個性があつて違うため、ある程度強引にはなってしまうのですが、タイプ分けをして、このタイプには乗馬プログラム、また別のタイプにはコミュニケーションのプログラム、といったようなやり方を採用すれば、マッチングの研究のエビデンスが深まるのではないかと思います。もし、そのようなデータがどんな出るようになれば、行政・国も保険対象とすることを考え



るのではないかと思います。

【野瀬】

一か所で行うには限界があると感じますので、複数の機関が連携をして、それぞれの機関で担当分担を行い、チームとしての研究体制を築くというのがこれから必要になってくるのではないかと思います。

【柿沼】

病院での心理相談は、基本的には主訴があることが前提です。そして、その主訴に対して、比較の数値化しやすい、もしくは親が実感しやすいものを一つの目標として確認することを行っています。主訴を元に治療を行うので、具体的な効果を急がない、ということは病院に関しては比較的やりやすいのではないかと感じています。

【岩永】

障がいのある方は、通常診断で分類されるのですが、この分類が必ずしもホースセラピーの効果とマッチングするわけではないと思います。今後、効果研究をやっていく際に、ある程度ホースセラピーで期待できることを最初に考えてから行うことも必要かと思えます。その際に、例えば「自閉症群」といった分類をすると、合う人と合わない人が出てくるので、感覚の特性や馬が好きかどうか、というような分類で群を作っていく、最初はある程度効果が期待できる群に絞って行うのが良いのではないかと思います。ただ、ホースセラピーをどこまでがホースセラピーとしてとらえるのかということもあります。騎乗だけではなく、前後の馬の世話や道具の管理もホースセラピーに含めると、発達障がいの方にとっては教育的にもいいことがあります。南高愛隣会は、職員が利用者の特性をよく理解していただき、準備の段階から教育的な関わりをしていただき、騎乗以外の馬との関わりも非常に重視されており、それは非常に大事だと思いますので、ホースセラピーをどう定義づけるのか、というのもしっかりと考えていく必要があります。

ます。騎乗時と曳き馬時と分けてから効果を検証するといったことも必要かと思えます。

【門司】

どのような指標を作って、どのようなデータを、どのような方法で取っていくのかについて統一したものを学会で作り、そこからいいエビデンスが出せるのではないかと思います。そして、それが、次に続くスケールアップや保険適用といったものにつながればと考えます。

■ スケールアップと保険適用

【観客A】

保険適用に結び付けたいのであれば、例えば、脳梗塞によって身体障がい者となった方にもホースセラピーを受けてもらい、データを取れば、いいデータが取れるのではないかと思います。ですが、いかがでしょうか。

【局】

身体的障がいの方に関してはエビデンスが取りやすいというのはおっしゃる通りです。私たちは脳性麻痺の方を中心にエビデンスを取り、長期効果を検証しました。乗馬セラピーを行った群と、行わなかった群を比較する研究を行ったところ、長期効果が出ており、特に歩行機能の改善が見られ、姿勢が良くなるという結果が出ました。驚いたことは、乗馬セラピーを休止しても、その3か月後に同じような検査をしてみても、乗馬セラピーを行った群の方が効果が持続していました。ですから、まだ研究途上ではありますが、身体障がいがある方に関しては、やり方によってはきちんとしたエビデンスが出てくるのではないかと思います。

【観客B】

行動障がいの激しい人に関しては、馬に乗って速足をするなどで確実に情緒は安定します。しかし、問題はそれをデータとしてどのように出していくのかということです。一か所だけ



のデータではなく、一つの基準を設けて、それに基づいてデータを取っていき、仮説を立てながらやっていかないと全体的なデータは出しにくいのかなと思います。

【門司】

現場の方と研究者が連携することは非常に大切なので、今日がその第一歩ということでネットワークを作り、現場と研究が一体となってやっていければと思います。

【観客C】

不登校、発達障がい、そして対人問題を抱える大学生を対象としたプログラムはありますか。

【局】

非常に少ないと思います。組織的にまとまった形で大学生を対象としたセラピー活動はあまりないのでは感じております。

【観客D】

大学生向けのプログラムは基本的には少ないと思いますが、大学生が地域との連携を学ぶ一環で、馬を用いた授業をやっていたり、研究活動でホースウェルネスプログラムを作ったりして、馬の中で過ごすプログラムを広げていくという活動をやっているところはあります。

【門司】

一つのエビデンスを示して、色々な形で動物介在療法を進めていった上で、それをどのようにスケールアップしていくか、経営を成り立たせるのかを議論したいと思います。

【絢野】

南高愛隣会では、曳き馬と必要に応じたサイドウォーカー付きの乗馬料金は1回5000円の利用料で行っていますが、年間6千人乗せたとしても3百万円の計算です。これでは経営は無理です。ホースセラピー部門は法人の他の収益でカバーしてもらって成り立っています。馬だけで経営していくのは難

しいので、究極的にはやはり保険適用が必要かと考えております。

【観客B】

乗馬療法だけで経営する場合、私の試算では、1回5万円程度の利用料であれば、職員にきちんと給料を出せることが出来ます。ただ、1回5万円となると利用できる方が限られてくるので、福祉施設のサービスの一環として低料金で行っているだけで、決して採算が取れているわけではありません。

【野瀬】

一つはリピーターを増やすことが重要ではないでしょうか。そのためにはプログラムを充実させることも大事です。

【門司】

様々な問題を解決するためには、馬がもつと身近になる必要があるのかも知れませんね。活発な意見交換、ありがとうございます。



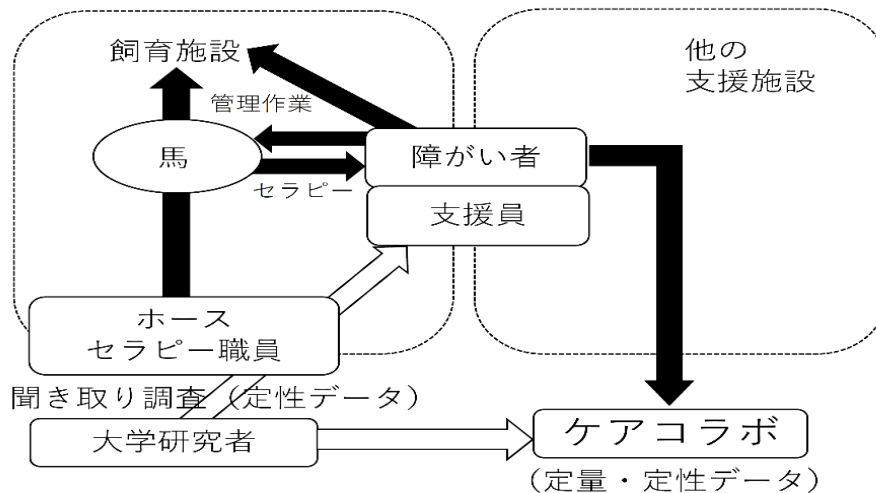
趣旨説明

賽漢卓娜（長崎大学）

長崎大学多文化社会学部では 2022 年度の実習科目「リサーチ基礎」（担当：賽漢卓娜・佐藤靖明）において、長崎市の「あぐりの丘」で南高愛隣会が運営する乗馬施設「TERRACE からふる」（当時）をフィールドに、学生約 25 名がホースセラピーの現場を多角的に調査した。調査結果は、2022 年 7 月 6 日に長崎大学にて公開研究報告会を実施して報告した。

前記調査を踏まえて、より専門的な調査・分析を行うことで、障がい者支援や介在動物飼育の分野での知見を深め、日本各地にあるホースセラピーの現場の状況改善に寄与できると考えた。そこで、産学連携の共同研究「ホースセラピーにおける馬と障がい者の関係性に関する研究」に着手し、2022 年度の長崎大学地域共同研究支援事業に採択された。本研究の対象であるホースセラピーの実施主体である社団法人南高愛隣会は、1992 年より 30 年間にわたり、障がい者の治療、生活改善にホースセラピーを取り入れてきた。2020 年以降は馬の飼育環境を改良し、馬の健康状態の改善をもたらした。また、それにともなって障がい者が馬と積極的に関わるようになり、彼らの活動範囲が広がり行動が活発になる様子もうかがえる。この一連の成果は、科学的見地からまだその効果を検証できていない。ホースセラピーにおいて、馬の開放的な飼育環境によって馬と障がい者の関係がどのように変化し、障がい者の心身や生活にいかに関与したのかを実証的に明らかにすることを、本研究のめざす目標とする。愛隣会の関係者とともに、長崎大学側の研究者は、保健分野、人類生態学、人類学、社会学など多岐にわたる研究分野からアプローチをし、ホースセラピーの効果の実証とそれにもとづく方法論を目指す（図 1）。また、シンポジウムを開催し、多面的な観点からホースセラピーの可能性を議論していく。

図 1：調査研究関係図



人と馬を癒すホースセラピーの世界

局 博一（東京大学 名誉教授）

日本におけるホースセラピー活動は、1990年代から一部の関係者によって開始され、現在では北海道から九州、沖縄まで全国各地の施設、団体で活発に行われるようになりました。「ホースセラピー」は、馬が介在あるいは介入する教育・療育活動や補完的医療活動の総称です。ホースセラピーを行う意義は、一言でいえば、児童、障がい者、高齢者といった市民が馬とふれあうことによって、日常生活の質（QOL）を高めることにあります。また、馬が活躍し、社会貢献ができる場が増えることによって、馬というかけがえのない社会的動物が人類の伴侶動物として存続できる点にも意義があります。

ホースセラピー活動の特色として、教育学、心理学、動物学、医療、社会福祉、地域文化など、様々な分野が相互に関連しあう典型的な学際領域の一つでもある点が挙げられます。

近年、馬介在療法の健康効果に関する研究が世界的に盛んになりつつあります。メタアナリシスあるいはシステムティックレビューと呼ばれる全体評価では、脳性まひ、多発性硬化症、自閉スペクトラム症、高齢者などで、姿勢バランスや歩行といった身体機能の向上やコミュニケーション能力などの社会的適応能力が有意に向上すること（QOLの向上）が報告されています。

ホースセラピー活動が円滑に効果的に実施されるためには、何といても馬と人との間に十分な信頼関係が築かれていることが基本になります。馬の健康状態が良く、馬にとって少しでも快適で安心できる環境が日ごろから備わっていることが大切であり、馬の馴致・調教もそのような点に配慮して実施されます。つまり、馬のQOLが保証されて初めて、安全で楽しく、より効果的なホースセラピー活動が進められることになります。

様々な分野の方々のご理解とご支援を頂き、「人は馬に癒され、馬は人に癒される社会」の輪が広がることを願っています。

ホースセラピーとは？

（乗馬療法、馬介在療法、ヒポセラピー…）

基本概念

- ◎ 馬が介在（介入）する教育/療育活動や補完的医療活動
- ◎ 病気を治すことが主目的ではなく、日常生活の質（QOL）を高めることに視点

<特色>

学際的領域：

動物学、教育学、心理学、医学・パラメディカル、社会福祉、動物福祉、市民活動などの分野が関連、連携

ホースセラピーの意義

- ◎ 精神的、肉体的な改善を通じた自己肯定感や社会的適応力の向上、居場所の気づき
- ◎ 本人、保護者、施設関係者のQOL向上
- ◎ 馬の社会的貢献（ソーシャルホースとしての存在意義）



南高愛隣会のホースセラピー現場

絢野 ナチン（社会福祉法人 南高愛隣会）

1992年に、社会福祉法人南高愛隣会は利用者の身体機能の改善と維持、メンタル面での療育を目的にホースセラピー事業を始めた。2022年4月に「ホースセラピー研究センター」を発足させ、将来ホースセラピーへの介護医療保険の適用促進を目的に、馬の福祉に配慮した飼育管理とセラピーサービスを提供しながら、効果検証の準備作業に取り組んでいる。

南高愛隣会では、馬の自然性と福祉を配慮した全天候放牧を2020年11月から部分的に、2022年1月から全面的に実行している。その結果、馬が穏やかになり、セラピー活動のコンテンツが多様化し（表1）、利用者の選択肢が増えて、参加意欲が向上した。

表1.馬の安定化による活動内容の多様化。黒字は従来の活動、緑字は馬の安定化で増えた活動項目である。

環境整備	馬活動	対外営業	その他
<ul style="list-style-type: none"> 馬房掃除 馬房づくり 道具洗浄 ポロ捨て ポロ拾い 	<ul style="list-style-type: none"> 餌づくり 曳き馬 乗馬 放牧 馬装準備 馬匹移動 牧草集め 牧草の運搬 	<ul style="list-style-type: none"> 乗馬受付 客対応 受付準備 道具準備 ゲート開閉 曳き馬 	<ul style="list-style-type: none"> 水やり 堆肥作り 堆肥撒き 種まき おが屑の袋詰 おが屑運搬 餌運搬 お弁当運搬

利用者の中から、馬介在活動に意欲的に参加した結果、眠気による転倒頻度の減少（図1）と、体重が減少するケースが確認されている（図2）。

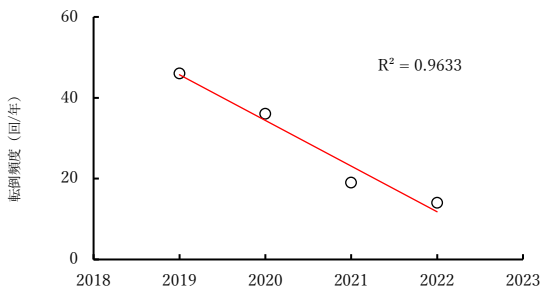


図1. 馬介在活動への参加による利用者A氏の転倒回数の変化 (2019.6~2022.8)。

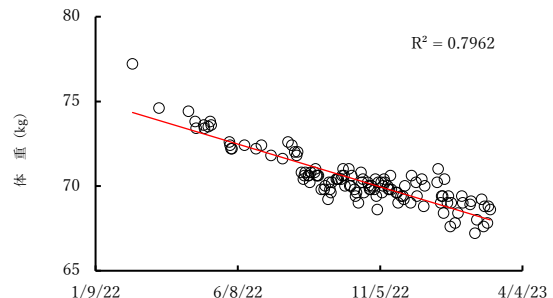


図2. 馬介在歩行による利用者I氏の体重変化 (2022.2~2023.3)。

全天候放牧を実施するまでは、馬の飼育管理現場では主に馬房清掃に時間を割いていたが、放牧による馬房使用率の減少で清掃時間が短縮したほか、活動内容の多用化で単位活動の質量と利用者への負担が減った。また、馬の気性が穏やかになり、利用者の活動選択肢が増えて自信が向上し、現場の平穏性に繋がった。

南高愛隣会はこれからも動物の福祉に配慮したセラピー用馬の育成と、穏やかな福祉現場作りに取り組みながら、動物介在介入の効果検証に寄与する所存である。



動物介在介入における動物福祉

野瀬 出（日本獣医生命科学大学）

1960年代のイギリスにおける農用動物の劣悪な飼育環境が問題化したことがきっかけとなり、動物福祉(Animal welfare)は社会的な関心を集めるようになった。その後、動物福祉の対象は農用動物だけでなく、実験動物や伴侶動物、動物園動物にも拡大された。動物介在介入(AAI)においても動物福祉は欠かせない要因となっている。本講演では、AAIの介在動物に対する動物福祉的配慮の概要について述べる。AAIに参加する人間や動物に求められる条件、AAI実施前・実施中に必要となる手続きについて説明し、人間および動物の双方の福祉に配慮することの重要性(One welfare)について考える。



馬とダウン症者の関わりから考える One Welfare

柿沼 美紀（日本獣医生命科学大学）

ダウン症者の特性として、幼児期は陽気で積極的に人に接していくが、思春期以降、口数が少なくなる、無気力になるといった傾向に加え、肥満、糖尿病などの健康問題も併発する場合がある。

東京通信病院の「東京ダウンセンター」は乳児から成人まで多くの人々が利用している。筆者もダウン症者のカウンセリングや知能検査を担当している。特に思春期以降に就労移行支援、就労継続支援事業所等に馴染めず、引きこもりになる、不安が強くなるといった相談を受ける。一方で、室内でほとんどの時間を過ごす生活介護事業の利用を躊躇う保護者も少なくない。生活介護の場においても、物静かで活動量が少ないと、外部からの刺激を受ける機会のないまま年を重ねてしまう人もいる。

One welfare とは、動物の福祉は人の福祉と密接に関わっているという考え方である。

南光愛隣会で飼育管理されている馬は原則 24 時間放牧されており、仲間同士のコミュニケーションも自由に取れる。そのためか、1日の大半を馬房で過ごす馬に比べ、リラックスしており、人に対しても穏やかである。

愛隣会の生活介護事業では、利用者が乗馬に加え馬の飼育管理も行なっている。性格が穏やかな馬との触れ合いは利用者にとっても安心できるものであり、馬にとっても、束縛されることなく人と関われる環境となっている。

馬の放牧管理には、専門スタッフの包容力と優れた観察力、コミュニケーション力が不可欠である。

ワンウェルフェアの理念のもとに行う動物介在介入、療養は、ダウン症者も馬も安心して参加できるものである。その実施には、人と馬に対する感受性の高い優秀な専門スタッフの存在が不可欠である。



感覚統合と発達障害

岩永 竜一郎（長崎大学）

演者は、作業療法士であり、これまで自閉スペクトラム症（ASD）などの発達障害児者に関わってきた。とりわけ、発達障害児者の感覚面や運動面の支援に力を入れてきた。発達障害児者のコミュニケーション、対人関係、行動、情緒の問題に比べ、感覚や運動の問題は注目されないことがある。しかしながら、自閉スペクトラム症の約 7 割には感覚過敏などの、感覚の問題が見られることがわかっている。姿勢の不安定さ、協調運動の苦手さなどの運動の問題は発達障害児に高頻度に見られることもわかっている。発達性協調運動症（DCD）という発達障害は 5-6%に見られることがわかっており、注意欠如多動症（ADHD）の 55%、ASD の 89%にも DCD が見られることが報告されている。感覚や運動の問題は、それ自体が発達障害児者の生きにくさにつながっていることもあるし、それらと関連した情緒、行動の問題が起こっていることもある。

このような発達障害児者の感覚面、運動面の問題に対して、感覚統合療法を行うことがある。感覚統合療法は、子どもの感覚・運動の問題、それに関連する行動や情動の問題に対して、大型遊具などが設置された部屋で遊びを通して、セラピストが介入する形で行われる。その内容の例として、スイングを用いて子どもの感覚の受け入れを改善する前庭刺激を提供する活動、ボールプールやシェービングクリームなどを用いた触覚活動、アスレチック遊具を用いた運動プログラミング力を育てる活動などがある。このような活動を通して、発達障害児者の感覚刺激に対する反応、バランスや運動プログラミング力、情緒、行動などに改善が見られることが多い。

感覚統合療法の専門家の中には、ホースセラピーを導入している人がある。ホースセラピーには、感覚統合理論で重視されている介入の視点が多く含まれていると考えられる。

本シンポジウムでは、発達障害児者の特性への感覚統合療法の必要性、感覚統合理論から見たホースセラピーの重要性について私見を述べたい。



公開シンポジウム

One Welfare



動物介在療育法の可能性



2023 年

3 月 12 日

9 時 30 分～12 時 30 分 (9 時開場)

場所 長崎大学 医学部 記念講堂

(長崎市坂本 1 丁目 12-4)

参加申込

QR コードからお申し込みください。
当日の参加登録も受け付けております。
また、シンポジウム終了後はこちらから
動画をご覧いただけます。
<https://www.airinkai.or.jp/one-welfare>



お問い合わせ

社会福祉法人南高愛隣会
✉ nachin@airinkai.or.jp

共催

社会福祉法人 南高愛隣会
国立大学法人 長崎大学 多文化社会学部



本シンポジウムは、長崎大学地域共同研究支援事業「ホースセラピーにおける馬と障がい者の関係性に関する研究」による助成を得て開催します。

聴講無料

プログラム

司会 佐藤 靖明(長崎大学)
趣旨説明 賽漢卓娜(長崎大学)

基調講演

人と馬を癒すホースセラピーの世界

局 博一 (東京大学)

講演

南高愛隣会のホースセラピー現場

絢野 ナチン (社会福祉法人南高愛隣会)

動物介在介入における動物福祉

野瀬 出 (日本獣医生命科学大学)

馬とダウン症者の関わりから考える one welfare

柿沼 美紀 (日本獣医生命科学大学)

感覚統合と発達障害

岩永 竜一郎 (長崎大学)

パネルディスカッション

コーディネーター

門司 和彦 (長崎大学)

One Welfare 動物介在療育法の可能性

編 集 絢野ナチン・賽漠卓娜・佐藤靖明
発 行 社会福祉法人南高愛隣会・長崎大学多文化社会学部
発行日 2023年5月31日



本シンポジウムは、長崎大学地域共同研究支援事業「ホースセラピーにおける馬と障がい者の関係性に関する研究」による助成を得て開催しました。

共 催

社会福祉法人南高愛隣会 ・ 長崎大学 多文化社会学部